

こんにちは！ 室長の工藤です。

かつて、青森市の鳥となっていた海鳥ウトウは、善知鳥宮の境内にある沼が繁殖地であったとする藩政時代の記録があるなど、この地と深い関わりがあったと一般に理解されています。ただ、現在ではめっきりその数は減り、漁業関係者が船で沖に出た際に、たまたま目にする程度になってしまったといえます（『新青森市史』別編自然）。



ウトウ

(『市勢要覧』平成12年、青森市)

さて、資料に記される「善知鳥」は、上に述べたような鳥そのものを指すばかりではなく、「外浜」と不可分のものと観念されて、「境界領域」を表わす象徴的な文言でもあるとも考えられるのです。たとえば、長野県塩尻市に善知鳥峠という峠があります。峠は境の場所であり、こちらの善知鳥峠は日本海側と太平洋側との分水界となっているといえます。さらに、佐渡島にも善知鳥という地名があり、慶長5年(1600)創建の善知鳥神社があるそうです。佐渡島は10世紀の初めには日本の北の境界と認識されています。ですから、青森の善知鳥は、東の境界領域との関連が想定されるのです。

もうひとつ、善知鳥には「獵師」と関わりを持つ伝承・伝説が存在しています。善知鳥峠の場合、ウトウを捕らえた獵師の父子の民話が伝えられているといえます。一方、青森の善知鳥についても、世阿弥の作という謡曲「善知鳥」の中で、生前ウトウを捉えたために地獄に墜ち苦しんでいる外浜出身の獵師の霊が登場します。ここに出てくる獵師は「殺生人」として観念される「殺生禁断を厭わ^{いと}ない」存在、すなわちケガレを意味しています。そして、とくに中世の日本社会においては、都(究極的には天皇の身体)が最も清浄な場で、そこから離れていくことで同心円状にケガレが増幅すると観念的に理解されていたといえます。したがって、日本列島の東と北の境界である外浜と佐渡は、ケガレが充満した領域と認識され、そこに「善知鳥」が結びついてくるのです。また、ウトウそれ自体も「死して化鳥」となる「怪異」との認識もあり、やはりケガレと結びつくのです。善知鳥峠も境界領域の一つなので、同様に考えられます。



「謡曲善知鳥之旧跡」の碑
(善知鳥神社)

もちろん、青森の「善知鳥」は海鳥ウトウとの関係もあって、江戸幕府からウトウの由来についてたびたび尋ねられ回答するとともに、その頃偶然猟師の網にかかったウトウを塩詰めにして献上しています。一方、今回紹介しましたように、「善知鳥」という文言は、広く日本列島の境界領域・観念と結びついた存在でもあったのです。